

農試第957-2号
平成22年9月28日

各関係機関の長 様

福井県農業試験場長
(公印省略)

平成22年度農作物病害虫発生予察特殊報第2号の送付について

このことについて、下記のとおり発表しましたので送付します。

連絡先	福井県農業試験場病害虫防除室
Tel	0776-54-5100
FAX	0776-54-6403
E-mail	byogaicyu-boujo@fklab.fukui.fukui.jp

平成22年度農作物病害虫発生予察特殊報第2号

本県において、平成22年9月24日にトマトにすすかび病の発生が確認されたので、9月28日付けで特殊報第2号を発令する。

全国では、平成8年に宮崎県で発生が確認されて以来、現在までに1府22県で確認されており、本県では初めての発生である。

病 害 虫 名：トマトすすかび病

病 原 菌：シュードサーコスポラ フリゲナ

(*Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton)

発 生 作 物：トマト

1. 発生の経過

平成22年9月下旬に福井市の施設栽培トマト（品種：桃太郎ファイト、B.バリア）の葉に、葉かび病に酷似した病害が発生した。県農業試験場で罹病葉を顕微鏡で観察した結果、分生子の特徴から *Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton によるトマトすすかび病と診断した。その後の調査であわら市でも確認された。発生面積は約20aである。

2. トマトすすかび病について

(1) 病徴

- 1) 本病は葉に発生する。初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。病斑はしだいに拡大して、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色から黒褐色に変わる (図1)。
- 2) 葉の表面には、裏面よりやや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑が形成され、かびを生じるが、葉裏に比べて少ない。
- 3) 被害葉は早期に下垂し、乾燥巻縮して全葉が濃緑褐色のかびで覆われる。発病は下位～中位葉に留まり、葉かび病に比べ、上位への進展は少ない傾向にある。
- 4) 病徴は葉かび病に酷似しており、肉眼での判別は困難である。殺菌剤散布後により治癒した病斑は黒褐色ではあるが、かびは消失している。

(2) 病原菌の特徴と発生生態

- 1) 病原菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属する。分生子は淡褐色の鞭状または円筒形で、先端は少しくびれ、小型の油胞がある。大きさは縦 13.3～170.3um×横 2.7～5.6um で、0～15 個の隔壁がある (図2)。一方、葉かび病菌の分生子は単胞または2細胞で、大きさは 14～38um×5～9um であり、すすかび病菌との区別は、分生子の形態観察によって容易にできる。
- 2) すすかび病菌の生育適温は 26～28℃、分生子の形成適温は 18～22℃、分生子の発芽適温は 26℃付近である。
- 3) 本菌は被害植物の残さで越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件が続くと発病しやすく、密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。
- 4) トマト品種の葉かび病抵抗性の有無に関係なく発病するので、葉かび病耐病性品種に葉かび病様の症状が発生している場合には、すすかび病の疑いがある。また、すすかび病と葉かび病が混発することもある。

3. 防除対策

- (1) 多湿条件で発病しやすいため、過繁茂をさけ、施設内の換気に努める。
- (2) 発病葉及び被害残さは伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (3) 登録薬剤と使用基準
 - 1) トリフミン水和剤 (トリフルミゾール水和剤) 3000 倍、5 回以内、収穫前日まで
 - 2) ダコニール 1000 (TPN水和剤) 1000 倍、4 回以内、収穫前日まで
 - 4) ベルコートフロアブル (イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤) 2000 倍、3 回以内、収穫前日まで



図1 トマトすすかび病の病徴



図2 トマトすすかび病の分生子